

Title	経済学とその歴史の理解のために
Sub Title	
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1996
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.88, No.4 (1996. 1) ,p.622(120)- 623(121)
JaLC DOI	10.14991/001.19960101-0120
Abstract	
Notes	読書案内
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19960101-0120

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

読書案内

経済学とその歴史の理解のために

飯田 裕 康

まずあげておかねばならないものにシュンペーター『**経済分析の歴史**』（東畑精一訳、全7冊岩波書店）がある。1954年に刊行された本書は、シュンペーター自身による決定稿ではないが、今日においても経済学史の基本文献としてその生命を維持しつづけている。本書の特徴は何より著者が一貫して経済分析の歴史に視座を限定し、それを核に縦横に議論を展開し、経済学の歴史にあらわれる興味深い多くのトピックを読者に提供していることである。経済学史の面白さを知ろうとするのに、本書をまずすすめたい。引用や言及される文献にかんする書誌的な考察も厳密である。

いわゆる近代経済学がどのような歴史を経て何を問題としようとしてきたかについて批判的に考察したものとして、森嶋通夫『**思想としての近代経済学**』（岩波新書）がある。著者にとって近代経済学とは単に新古典派理論を指すだけではなく、古典派やマルクスを経てそれらを克服しようとした思考の全体を指している。とりわけ著者が経済学史の本道よりは、異端的な理論家や思想家を重視する姿勢に本書の大きな特徴がある。同じ著者によるマルクス論『**マルクスの経済学**』（高須賀義博訳、東洋経済新報社）にも、著者の率直で真摯な経済学への姿勢が読みとれる。

経済学史を自己の理論体系の構築に積極的に応用した巨人的思想家の一人が、カール・マルクスである。かれの『**資本論**』（新日本出版社、全13冊）はまさに経済学史研究の成果であるといって過言ではない。批判の前に厳密なテキストの検討を心がける。この点でマルクスの右に出るものはないであろう。今日マルクスについては実に多様な評価が行われている。一思想家の人間像がこれほどまでにあからさまにされる時代もない。われわれはまことにしあわせな時代に生きている。このようにときに広松 渉『**今マルクスを読み返す**』（講談社現代新書）によって硬質で揺るぎないマルクスの思想像と格闘してみてもはどうだろう。あるいは的場昭弘『**トリーアのマルクス**』（未来社）のような社会史的な緻密な実証研究の成果に触れることで、マルクス研究のフロンティアをかい

座談会「経済学、何を学ぶか」と関連して、各分野についての学部学生のための読書案内を本号に掲載します。（三田学会雑誌編集委員会）

まみることができよう。

歴史とは現代と過去との対話であることを強調したのはイギリスの歴史家 **E.H.カー** の『**歴史とは何か**』（岩波新書）である。最近筆者は、カーのこの考え方に通じる現代と過去との実に真面目な対話を実現しようとする著作に接して感動した。溪内 譲『**現代史を学ぶ**』（岩波新書）がそれである。著者はソ連経済史の専門家であるが、研究対象自体の大きな変動をしっかりと受けとめ、歴史家の心すべきことを率直に語っている。政治に翻弄される社会科学や歴史学の問題性を本書ほど鋭くついたものはないように思う。1990年以降の世界史的状况の激変のなかで、何を心に据えて研究対象と取り組むべきなのか、われわれに突きつけられる問題はあまりにも大きい。このようなときに、まじめに歴史を考える姿勢を本書は遺憾なく教えてくれる。論理的な解析能力がますますその比重を高める最近の経済学の対極に、過去の「事実」の掘りおこしから現代を見据えようとする着実な歴史研究があり、これら両極は決してバラバラなものでないこと、メダルの両面であることを、ここに留めてほしい。

最後に、われわれはしっかりこの大地の上に立つ。すべての出発点はここにある。このことを地球環境を振り返ることで再確認しよう。世界史の舞台の現況を考えるために石 弘之『**地球環境報告**』（岩波新書）を小さな第一歩としたい。

（経済学部教授）